

## 近代日本における修辞学研究の特質 その一つ西洋の修辞学変遷の再現

SPECIAL CHARACTERISTICS OF  
MODERN JAPANESE RESEARCH ON RHETORIC  
Reproduction of the Transitions in the Western Rhetorical Tradition

Massimiliano TOMASI\*

Western rhetoric was first introduced into Japan during the early Meiji period and thereafter research on rhetoric gradually blossomed and developed. After the Meiji Restoration, though influenced by the West, Japanese research on rhetoric laid roots in the native soil and reached the point where it achieved its own unique development configuration. Although the development processes of research on rhetoric in both Japan and the West bear considerable resemblance, they are not necessarily congruent. A good many phenomena can only be observed in Japanese research on rhetoric, for example, the movement for unification of the spoken and written languages and Japanese literature's naturalist movement.

However, of particular interest, Japanese rhetorical studies

---

\* マッシミリアーノ・トマシ イタリア フィレンツェ大学教育学部日本語学科卒業。名古屋大学大学院文学研究科日本語文化専攻在学中。明治・大正時代における日本の修辞学研究が主な研究テーマ。論文に「日本語のレトリック—修辞的操作としての擬声語の成立問題—」（名古屋大学言語文化研究委員会刊『ことばの科学』第6号）、「島村抱月における修辞採否の問題」（日本文学協会刊『日本文学』第44巻2号）などがある。

reproduce in virtually identical form the scholarly transitions of Western rhetorical studies. In other words, the transition of rhetorical studies from speech-making methods to education in general composition over a more than 2,000 year span of time can be seen again in Japan. However, in the Japanese case this transition was completed in about fifty years. In this paper, I will examine the transition of Japanese rhetorical research by dividing it into four periods and analyzing each one. The first (1877-1889), the branch of rhetoric which deals with speech-making as seen from its introduction by Ozaki Yukio to Takada Sanae, the second (1889-1902), that branch of rhetoric which deals with literature and composition from Takada Sanae to Shimamura Hôgetsu, in particular that of composition education, the third (1902-1909), that branch of rhetoric which deals with aesthetic standards and the logic of metaphor which developed from Shimamura Hôgetsu to Igarashi Chikara, and the fourth (late Meiji to late Taishô) from Igarashi Chikara to the demise of rhetoric in its complete naturalization, i.e. the rhetoric which reached the point where it was applied to all the problems of Japanese language and literature.

The purpose of this paper is to demonstrate the unified development of modern Japanese rhetoric and how its development process was intimately connected to the problems of the Meiji and Taishô literary worlds and their solutions by clearly delineating the developments in Japanese rhetorical studies since the Meiji Restoration through its objects and purposes of research.

## はじめに

西洋の修辞学が日本に導入されたのは明治初期の頃であるが、それ以降修辞学研究は日本にも根付き、徐々に開花していった。いわゆる明治維新以降の日本の修辞学研究は、西洋からの影響を受けながらも、日本特有の土壌に定着し、独自の発展を遂げることとなった。日本と西洋における修辞学研究の発展過程は類似の様相を呈しているが、必ずしも一致するものではなく、たとえば言文一致運動や文壇（主に自然主義）との関係など、日本の修辞学研究にしか見られない現象も少なくない。

もっとも、表層的には日本の修辞学研究は西洋の修辞学が見せた学問的変遷とほぼ同様な形で再現されている。つまり、西洋で2000年以上にわたって見られた演説法から一般の文章に関する修辞学までの変遷が、同様に日本においても見られたのである。しかし、日本の場合はその変遷が約50年という短期間で見られたことに特徴があると思われる。

そこで本稿では日本の修辞学研究の変遷を四期に分けて考察する。すなわち、  
第一期（1877年－1889年）  
第二期（1889年－1902年）  
第三期（1902年－1909年）  
第四期（1909年－1926年）

本稿の目的は明治維新以降の日本の修辞学研究の発展を研究対象や目的によって明確に区別することで、近代日本の修辞学が一貫した発展を示し、また西洋修辞学と同様の変遷を見せたことを論証することにある。

以下、先ず、西洋の修辞学の変遷について概観し、上記の各時期について論じていく。

### 1 西洋修辞学の学問的変遷

一般に西洋の修辞学は紀元前5世紀からギリシャ及びローマに栄えた「説得の技術」として定義される。演説法として誕生した修辞学はアリストテレスに

よって理論的基盤が与えられ、真実らしさの理論として聞き手を説得することを目的とする技術であった。しかし、ローマ時代に入ると修辞学はキケロやクインティリアヌスの作品の中である種の変遷を遂げる事となる。アリストテレスにおいて修辞学は「どんな場合にも〔使用可能な〕説得に適したものを純理的に発見する能力」(『弁論術』)であったのに対して、ローマの雄弁家達において、「新しい弁論は、その理想が言説の内在的な特質にあるのであって、外的目的への奉仕の傾向によるのではもはやないという点で旧式の弁論とは異なる」のであった<sup>1</sup>。つまり、アリストテレスでは言語の手段の性質が中心であったのに対して、ローマの雄弁家達においてはことばの綾、いわば比喩が中心となっていた。このように、演説法として現われた修辞学は巧みに書くことまた美しい文章を作る技術となったのである。

クインティリアヌスによって体系化された修辞学は、そのまま中世に伝承され、中世の文化に浸透していった。しかし、ルネッサンス期に入ると修辞学の評価は低くなり、修辞学は虚言、強調した表現また文章の飾りにすぎないとみなされるようになった。例えば、1513年に出た『君主論』においてニコロ・マキャヴェッリはロレンゾ・マニフィコ・デイ・メディチへの献呈で自己の著作について述べ、「世の多くの者はその題材を説明したり飾るのに、調子の高い章句や美辞麗句、その他そうした見かけ倒しの外から取付けた文飾をもってするのがつねであります、私はこうしたものはいっさい用いませんでした」<sup>2</sup>と述べ、いわゆる装飾の表現を退けることを強調している。そして16世紀にペトルス・ラムスによって修辞学は「修辞」の部門に限定されることによって、その研究範囲が主として比喩の分類のみに限られるに至った。これはバルトが言う「分類熱」<sup>3</sup>の時代であったのだが、デカルトの論理主義的風潮の影響もあって修辞学の研究対象は比喩の手引書に限定される事となる<sup>4</sup>。やがて、ロマン主義的思潮による、押しつけられた規則としての修辞に対する嫌悪感が強まったこともあり、修辞学研究は下火となった。そして主に英米系の作文教育書を除くと、西洋では新たに修辞学研究の復興を見るには20世紀まで待たな

ければならなかった。

以上、西洋修辞学の変遷について概観してきたが、以下、日本の修辞学研究が西洋からの導入そして消滅に至るまでにどのように発展し、また変遷していったかについて論ずることとする。

## 2 日本における修辞学研究の変遷

### 2.1 第一期

既に述べたように、日本の修辞学は西洋の修辞学が見せた学問的変遷とほぼ同様な形で再現している。しかし、日本の場合、約50年間でその変遷を遂げている。この点については佐藤信夫も言及している<sup>5</sup>。が、佐藤は日本での修辞学の学問的変遷は尾崎行雄の『公会演説法』（1877）、菊池大麓の『修辞及華文』（1879）、黒岩大の『雄弁美辞法』（1882）の三つの著書にそれが見られるとしている<sup>6</sup>。つまり、尾崎の場合は、演説法としての古代修辞学の問題が中心に論じられ、菊池及び黒岩では言語による効果的表現技術が論じられており、日本における修辞学研究の変遷が凝縮して見られるとするのである。佐藤はまたこれらの研究は日本の修辞学研究の出発点とも指摘し、この時点までの研究を日本における修辞学研究の「前史」と位置づけている。しかし、本稿においては西洋修辞学が見せた2000年の流れを、日本の修辞学研究のわずか50年間のいわば導入、受容、昇華、消滅の四つの段階に求め、その変遷を分析することによって日本の修辞学研究がどのように西洋の修辞学の流れを再現したものであるかを論じていく。

明治維新後、最初に演説に関心を持ったのは恐らく明六社の人達であろう。彼らは演説会を行い、定期的に演説の練習も行っていた。そのことは『明治事物起源』にも次のように記録されている。「明治維新後、學術結社の祖なる明六社社員は、西洋風の演説も討論もなせども」、演説という訳語に関しては「スピーチを演説と訳して使用せる祖なるや否は未だ明ならず」<sup>7</sup> というようにである。つまり、「演説」の訳語が福沢諭吉による造語であるかどうかという

問題があるにしても、演説法の実体と内容を持ち込んだのは、福沢諭吉とその一党であったと考えるのが一般的である<sup>8</sup>。福沢諭吉は演説が文明や学術の発達のため不可欠なものであると考え、明治6年(1873)小泉信吉より得た洋書を参考にして『会議弁』を著した。この著作の意図について福沢諭吉は「我国にも必要のみか此法なきが為に、政治も学事も將た商工事業も、人が人に所思を通ずるの手段に乏しく、之が為に雙方誤解の不利は決して少なからず」<sup>9</sup>と述べている。当時、社友の中にも演説の重要性について疑問を感じている人は少なくなかった。森有礼もその一人であった。日本語では演説ができないという彼の意見に対して、福沢諭吉は反駁し、日本語によっても立派なスピーチができると強く主張している。しかし、福沢諭吉の主張において最も注目すべき点は、学問と演説との関係を明らかにしたことである。つまり、学問の発達のために、人との談話という行為は最も必要なものであり、これがなければ、学問は存在しないというのである。福沢諭吉は『学問のすすめ』(第12編)の中でもこの点に論及し、「学問は唯読書の一科に非ず」、また「学問の用は活用にあるのみ。活用なき学問は無學に等しい」とし、演説や談論による知識交易の重要性を主張している。そして「学問の本趣意は読書のみならずして精神の働きに在り」<sup>10</sup>と述べ、この働きを活用するために様々な工夫をしなければならないとしている。それは、視察、推究、読書の他に、「人に向かって言を述べざるべからず」ということであり、そして「この諸件の術を用い尽くして初めて学問を勉強する人と言うべし」ということである。福沢諭吉は三田演説館を開設し(開館式は明治8年5月1日に行われた)、演説技術の発展に大きく貢献した。「福沢らによって開拓された演説技術の発達があったればこそ、わが国における国会の開設や学会の結成も可能になり、国会の運営や学術上の諸会議の運営が円滑に行われるようになった」<sup>11</sup>という斎藤毅のこの言論からも、福沢諭吉が重要な啓蒙主義的役割を果たしていたことは明らかである。

福沢諭吉の言動もその一因となって、一般の演説への関心は高まっていった。明治11年(1878)には福地源一郎も「演説方サニ興り会議漸ク起ルノ今日ニ於

テ雄弁快論ハ公衆ノ欣望スル所トナリ世上稍々論弁ヲ学ブノ徒アルヲ見ル<sup>12</sup>と述べており、演説が隆盛であったことを裏付けている。その前年には日本に修辭学を導入したとされる『公会演説法』が出版されている。この書において著者尾崎行雄は雄弁によって「我身を利すること、実に僅小に非ざるなり」と述べ、演説の重要性を唱えている。そして「報国盡忠の至情心裏に貫徹し、活発不羈論說胸中に流溢し、口舌の妙機を経て口外に流出するものこそ眞の弁説者達弁家と云う可けれ」（11頁）と演説者についての定義をも提供している。即ち、この定義には演説者は社会的役割も担っているということが含意されている。このように、当時、演説は学術的な面でも政治的・社会的な面でも文明開化の進展に貢献しているが、これは『公会演説法』の次に出された著書によっても明らかなことである。たとえば植木枝盛は『言語自由論』（1880）において「実に弁論の力は偉大なものであると論じ、これを国家と結び付け、言論の自由は結局において、国家を發展され、人々を幸福にするために役立たせる必要がある<sup>13</sup>と主張している。一方、矢野文彦は『演説文章組立法』（1884）で「論説ナル者ハ人ノ未ダ知ラサル事實事理等ヲ組合セテ之ヲ他人ニ説示スルニ在リ」と述べており、民主主義の原則の一つである「知識の交易」の必要性を強調している<sup>14</sup>。そして、馬場辰猪は『雄弁法』（1885）のなかで「文明進歩シ人智開達スルニ從ヒ言語ノ増加ヲ来シ随テ又タ弁舌ノ自由ヲ受用スルニ至ルハ必然ノ理ナルガ故ニ之レヲ以テ社会ノ利益ト自己ノ利益トヲ謀リテ止マセルニ至レリ」と述べ、言論の自由と社会の利益との関連性を指摘している<sup>15</sup>。

演説集会は明治10年から14年頃まで盛んに行われたが、政府による取締りのため停滞期を迎えた。しかし、演説による民主主義的な役割はすでに大きく果たされていたと思われる。まず、政治的危機の中で社会や国家に対して新しい意識が生まれ、社会に対する国民の姿勢が変わりつつあった。そして人々は言語自体に対して新しい意識を持ち始めていたと思われる。その意識とは、人間はいわゆる「言霊」を自己の利益のために操作できるという新しい認識であった。それまで言霊の力が自らの行為を支配していた日本人にとって、神秘的実

体としてではなく、実用的実体としての言語の新しい性質を発見したことは、極めて衝撃的なことであったと思われる。

要するに、修辞学は啓蒙的風潮とともに日本へ導入されたものと考えられる。啓蒙主義的風潮とともに新しい時代転換と結び付き修辞学は紹介された。この点ではギリシャの民主主義的運動の中で誕生した古代修辞学と共通したところがある。だが、西洋では中世になってから修辞学がむしろ権力の武器としての性格を見せ始めたのに対して、日本の修辞学は本来の民主主義的性質を持ち続けたように思われる。西周は『百学連環』(1870)でレトリックを紹介し、それには「oral及びwrittenの二ツあり」とした後、「凡そ西洋に於いては口説と文章と一致にして、常に話す所の言語皆文法の規則に適するが故に、弁に長ずるものは必ず文に長じて文に長ずるものは必ず弁に長ぜしものなり。我が国の如きは更に常の言語と文書と一致することなし」と主張した<sup>16</sup>。これはそれ以降の言文一致の理論に関わる修辞論の最初の予言であるかもしれない。誰にでも理解できる新しい文章へという議論の中で、修辞論の役割は、極めて重要であり、本来の民主主義的性質が保持され続けているように思われる。また、同様の姿勢は大和田建樹の『修辞学』(1893)<sup>17</sup>が収められている《通俗文学全書》にも見られ、そこでは全書の目的は「貴族的文学にあらずして平民的文学の奨励にあり」とされている。要するに、福沢諭吉による通俗平易な新文体、前島密による「漢字御廃止之議」の提案、言文一致会による標準語成立への運動、そして文壇での新しい社会的現実を描写できるような写実主義思潮の誕生、これらの動きすべては当時見られたあらゆるものの民主化への動きを反映するものであり、修辞学もその現代化の過程に貢献できるものとしてかかわっていたのである。この時期の日本の啓蒙主義者は修辞学をギリシャや共和制ローマに見られたもっとも民主主義的性質のものとして解釈していたと考えられる。

## 2.2 第二期

1889年に高田早苗は『美辞学』を著し、早くも文学や文章への関心が現われ



ている。この著書は、当時、修辞論関係の最初の体系的な研究として高く評価されたが、内容的にはCampbell (1776)、Quackenbos (1855)、Bain (1866) に非常に近く、独創的なものとは見なし難い<sup>18</sup>。だが、次の二つの点で極めて重要な役割を果たしていると思われる。一つは、当時における修辞学研究と徳川時代までの研究との関係を明らかにしたことである。高田早苗は「美辞学」という用語を選んだ理由として、「修辞の文字たる古来東洋に存在したる者にして「レトリック」なる学問の訳語にあらず故に古く修辞通と題したる如き小冊子ありと雖其説く所の範囲極めて狭隘にして決して著作談論批評を能くするを教える学問と同一の者に非ず」（緒言）とし、明治時代以前の日本では特に文章（和文）に関する研究がなかったことを指摘している。ここで美辞学の研究対象とされている著作、談論、批評は、談論を除けば、高田早苗以降発展していった修辞学研究の二つの主な方向を示すものである。この意味で『美辞学』は、島村抱月の研究で頂点に達した批評としての修辞学と五十嵐力の研究で頂点に達した作文教育としての修辞学、双方のアプローチへの出発点と見なすべき研究である。

『美辞学』のもう一つの意義は、西洋の修辞学を東洋文学に応用しようと試みたことにある。この目的は『美辞学』ではまだ達成されなかったが、それ以降の西洋修辞学の日本化過程にとって極めて注目すべき点であったように思われる。またこの時期より嗜好、文体、作文の諸問題を取り扱った点では、西洋修辞学がクインティリアヌス以来見せ始めた文学や文章への関心に似た様相を呈していると言ってもよからう。従って、高田早苗の研究は導入のレベルを越えたものであり、しかも日本の修辞学研究の最初の姿でもあった。この時点で日本の修辞学は、「修辞学は「詩学」と対立することをやめ、今日なら、われわれが《文学》と呼ぶであろうような一つの超越的概念に包括されることになる」<sup>19</sup> ような、クインティリアヌス直後に見られた西洋修辞学に近い性格のものである。つまり、日本では修辞学がこの時期に早くも文章もしくは作文教育の研究範囲に限定されてしまったということである。すなわち、「修辞学は文

章を修成する方法を教える学科なり」また「国語をうまく書く方法を教えるもの」<sup>20</sup>となったのである。この時点で日本では修辞学は必然的に文章の研究と結び付いたように思われる。

作文教育の問題は、むろん、明治維新以来の民主主義化の過程で現われた諸問題に関わる課題であるが、江戸時代から古学の復興とともに見られた「規範」の追及の現象にもつながるように考えられる。特に、言文一致の議論の中で、作文教育は文章の基準を定めることを目標とし、必然的に新しい国家の建設に結び付いていたように思われ、作文教育としての修辞学の役割は、この点で注目されるべきであろう。中島幹事の『文章組立法』（1891）、富山房の『文章組織法』（1892）、萩野由之の『作文法』（1892）等<sup>21</sup>はこのような教育の立場からのアプローチであり、中島幹事の著書は「世に文章の教科書として教育的に説明せしものなきを嘆き」（1891:緒言）、自らの教育者としての経験に基づき著作に心掛けたという。つまり、西洋修辞学の言う諸規則を日本の文章に応用していくことを試みたのである。中島はさらに日本では文化の進歩の中で「文章の道のみ遅滞として、文化の進歩に後れたり」（同書：2）と批判しており、これによっても当時文章に関する研究がほとんどなされていなかったことが分かる。従って、中島の著書は「文章上に於ける思想の区別より、思想の表彰を会得せしめ、然る後、句読の組立より進みて、節段の組立と全編の組立とに於ける理論と技術」（同書：緒言）を論じたものであり、そしてその目的は教育の場で実用できるようなものを作ることであった。

この段階では、興味深いことに、バルトが言う比喩の「分類熱」はまだ見られない。例えば、中島幹事の前掲書は上編（思想）と下編（文章）から成っており、その下編では節、段の組立方が説かれている中で文のレベルに関わる、修辞に対応するものが所々間接的に取り上げられてはいるが、直接、修辞については触れていない。一方、服部元彦はその書『修辞学』（1891）の中で「修飾」についての章を設け、修辞について説いてはいるが、それはしばしば言及されてきた転義（直喩、隠喩、換喩、提喩、誇張法等）に限られている。同様

に、富山房は「話色」について明瞭正確を補うものと、勢力を増加するものとに分けて論じているが、この場合もほとんど普通の比喩に関するものであり、著書全体から見ても比喩についての分析は全体のわずか一部しか占めているにすぎない。萩野由之は比喩は扱ってはいないし、大和田建樹（1893）も「文の装飾」を文字上の装飾と意匠上の装飾に分けて簡単に説いているのみである。一方、武島又次郎（羽衣）は『修辞学』（1898）<sup>22</sup>では比喩を転義と辞様（これはいわゆる figures of words と figures of thought の区別に相当する）に分けて数多く紹介してはいるが、この著書でも「修辞」の部分が中心となっているわけではなく、分類的アプローチとは程遠いものである。さらに、佐々政一（1901）も『修辞法』では「本書は美文の分類を企てず、転義、辞様の区別を説かず、唯、言語文章を以て、有効に人間の思想を交通すべき方法を説かんとするのみ」<sup>23</sup>と述べ、この点では、当時の言文一致の議論の中でも、実用に還元できるものであったと考えられる。従って、この段階では修辞学の五科目（発想、配置、修辞、記憶、発表）の中で「修辞」の一科目の研究を優先するよりも、むしろ「発想」や「配置」の二科目を中心に扱った研究が多く、文章と思想の関係あるいはその思想の接続の方法が細かく説かれていた。例えば中島幹事の著書ではいわゆる「発想」と「配置」の二科目が中心となっている。そして、この立場は特に前掲の富山房及び武島又次郎の研究でも十分に窺い知ることができる。富山房では上編は「文体」、下編は「匠意」という区別が設けられているが、上編はそれまでの研究の繰り返しにすぎないが、これに対して、下編はむしろ独創的なものであった。一方、「体制」と「構想」の二編から成っている武島又次郎の著作では、構想とは明らかに「新たに感想を作り出すの義なる」（142頁）ものであり、「修辞」よりも「発想」に研究の重点が置かれている。

高田早苗の著書から島村抱月の『新美辞学』（1902）が出版されるまで、様々なアプローチ（たとえば修辞学を文章批評の方法として見ようとした坪内逍遙、あるいは西洋修辞学と中国の修辞学とを折衷しようとした服部元彦など）が試

みられたが、修辞学は文章の諸問題に関わるようになった。しかし、明治20年から明治30年にかけて見られた文章研究は明治40年以降現われてくる研究ほどには応用できるものではなかった。例文はほとんどの場合、古文や漢文であり、基本的に昔の名文を規範とした、美文のための研究であった。従って、一般の文章に応用できるものではなかった。また、ほとんどの場合、修辞学書では当時の文壇で行われていた言文一致運動について触れられず、故に修辞学は長い間（少なくとも明治40年前後まで）現実とかけ離れたものであった。このように修辞学が応用され得なかった点については二つの要因を挙げることができる。一つは、明治20年から明治30年にかけて言文一致が一時的に衰退したことである。この時期尾崎紅葉や幸田露伴等による雅俗折衷体の隆盛のため、文壇は大混乱となり、将来の文章のための基準を求めることは簡単なことではなかった。また、もう一つはその後もなく無技巧論を主張する自然主義運動が文壇を風靡し、修辞に対する姿勢も曖昧であり、このような状況下では、文章の基準は多様であり、基準を設定することは極めて困難なことであったに違いない。

1889年から1902年までのこのような変遷の過程を本稿では第二期と呼ぶことにするが、この時期には演説から文章への変遷が既に見られたとしても、修辞学研究はまだエリート文人だけの世界のことにすぎず、実際に国民の文章教育に応用できるようなものではなかった。

### 2.3 第三期

島村抱月（『新美辞学』1902年）<sup>24</sup>は、それまでの研究を理論化し、科学的位置を与えたという点で日本における修辞学研究の発展に極めて重要な役割を果たした。抱月は初めて修辞学とその隣接領域である文法、論理学等との関係に重点を置き、修辞学があくまでもその隣接領域の変動との関わりの中で読まれなくてはならないことを明確にした。そして、抱月は「言語研究の一半は国語的習慣によるべし、語法学是なり。他の一半は心理的法則に基くところの美辞学に相当」（1902:94）すると指摘することによって、本来の修辞学と心理学の

密接な関係を明らかにするとともに、昭和時代に入ってから修辞学で新しく試みられた文章心理学のアプローチに刺激を与えたと考えられる。

確かに、五十嵐力も指摘しているように、島村抱月の修辞学は「余りにも専門的で俗耳に入り難いという遺憾」<sup>25</sup>があり、当時要求されていた作文指導とは無関係なものであった。「美辞学とは辞の美なる所以を研究するの学也」(1902:5)、そして「辞を修飾して美ならしむる理を説く」美辞学は「一箇の文章学なり。而して文章は一面の美術なり」(1902:1)というような定義からも明らかであるように、彼の修辞学は作文指導でもなければ、文章をうまく書くためのものでもない。それは文章の美を包括的に理解することであったのだ。このように、抱月は美学的基準として修辞学を工夫したのだが、文章家、作文教育者の期待には答えられなかったのである。しかし、ここで『新美辞学』の他に、彼が明治31年から明治44年にかけて書いた言文一致と修辞学についての諸論文に注目したい<sup>26</sup>。そこでは抱月は、言文一致による新しい文章の誕生と、修辞学研究との理論的接点を明らかにすると同時に、それ以降の日本語の形成に関わった言文一致論に決定的な刺激を与えたとと思われる。本稿ではこの問題について深く触れないが、基本的な点について一言しておきたい。つまり、一方で抱月は言文一致を支持しながらも、他方では修辞学の重要性を認め、旧文章と新文章の違いは修辞の差異であって修辞の有無ではないことを明らかにし、修辞学の必要を力強く主張したのである。そして言文一致と修辞学との関係について『新美辞学』(79頁)の中で既に次のように述べている。言文一致の今後の問題は「如何に今語法を補正すべきか、如何に今言を、装飾すべきか、而して如何に言以上に修辞的特色を有する文体を創すべきか」であると。ここに新しい文章のための新しい修辞の問題が登場する。つまり、言文一致はおのずから特有な修辞を発展させなければならないという抱月独特の考え方である。

ところが、第二期の研究と比較すれば抱月の研究には一つの変化が生じている。第二期の研究では細かい比喩分類が特に行われなかったことを2.2で述べたが、これに対して島村抱月の研究では比喩に対する分類的アプローチが見ら

れるのである。『新美辞学』の第二編の第二章では抱月は詞藻を説き、29の比喩を区別している。実際、この細かい比喩分類への傾向は7年後に出版される五十嵐力の『新文章講話』で再び見られることとなる。そこでは五十嵐力は日本修辞学書としてはもっとも多くの詞姿を区別し、また抱月に見られるような学問的態度もしっかりと保っている。五十嵐力のこの著書は日本の修辞学研究の頂点とされているが、それはこの著書が西洋修辞学の伝統をもっともよくまとめ、理解し、体系的に分析し、さらに日本の文章への応用を可能にしたことによると言われている。しかし、それ以上に五十嵐の研究を特徴づけているのは、この著書によって日本の修辞学が新しい様相を見せ始めたことである。これまで言文一致や写実主義・自然主義とが対立してきた修辞学研究は、『新文章講話』以降、消滅しつつあったが、言文一致運動や自然主義と対立することはしなくなっていた。文壇を支配していた無技巧の理論に対し、五十嵐力は次のように言っている。最近「無技巧という語が新文章式の合言葉になった」が、「其意義を誤解して修辞無用論を唱える者もあるが、これは甚だ謂はれなき説である。「無技巧」は旧式の技巧、わざとらしい文飾を排する意味で、一切の技巧が文章に不要だというのでは決してない」(10頁)。そして自然主義の代表者と思われる作家の文章をとりあげ、そこに修辞が少なくないことを実証している。

このように、五十嵐力も島村抱月と同様に新文章と修辞との両立に努めたが、それまでの研究と比較すると、細かい比喩分類がこの二人の研究では最も目立つ共通点である。『新美辞学』および『新文章講話』の中で見られる比喩の分析は、西洋ではペトルス・ラムス以降見られた手引き書のための研究と共通点があると言えなくもない。つまり、日本でも装飾を研究対象とする修辞学は応用され得なくなり、比喩、いわゆる「発想」「配置」「修辞」「発表」「記憶」の中の「修辞」の部分に限定化されることによって、消滅の道をたどることとなるのである。実際、速水博司(『近代日本修辞学史』)も島村抱月及び五十嵐力に見られるこのような比喩に対する細かい分類が、それ以降の修辞学研究が下

火になった一つの原因であると指摘している。つまり、島村抱月や五十嵐力の研究とともに、本稿で言う日本の修辞学研究の第三期が終わっただけではなく、その研究の消滅の様相も現われ始めたのである。しかし、消滅しながらも、大正時代に修辞学研究が最も完全に日本化し、新文章の形成に大きく貢献したことは看過してはならないことである。

#### 2.4 第四期

大正時代に入っの修辞学研究では作文教育の問題が中心となり、比喩の分類を対象とする研究はほとんど行われなくなった。このため、この時期に見られる研究において比喩に関する分析は周辺的なものであり、ほとんどの研究は転義（直喩、隠喩、誇張法等）に限られていたと言ってよい。実際、西洋からの導入以来の日本の修辞学研究の発展を見ると、比喩に関する記述や分析はそれほど発達しなかったことがわかる。島村抱月及び五十嵐力を除けば、日本の修辞学研究の多くの著作は、「修辞」よりも「発想」や「配置」の部分（主に作文教育関係）と「発表」（演説関係）の部分に重点が置かれている。このように、比喩の分類への関心が低かったことについては三つの原因が考えられる。一つは、当時は無修辞論の傾向が強く、多くの人は作文を説明するにあたって、広く批判されていた比喩の虚飾性を避けようとしていたこと。もう一つは、日本では漢文系のものを除いては、単語よりも句と句の間のつながりを対象とした研究がなく、従ってこれらについての関心は極めて著しいものであったこと。さらにもう一つは、日本の修辞学研究にもっとも影響を与えたと思われる英米系の修辞学の中での比喩の位置づけのことである。つまり、比喩分類に傾いていた西洋の修辞学は、18世紀以降下火になり、数少ない著作でも比喩の扱いは周辺的なものになっていた。このため、日本でも文壇からの修辞廃止論とも相まって比喩の研究記述がそれほど進まなかったのである。

明治末期の頃、比喩論は島村抱月や五十嵐力において一時的に開花したものの、結局それほど発達せず、大正時代の研究では姿を消していった。内海弘蔵

(『文章十講』1910年)、八波則吉(『応用修辞学講話』1913年)、佐々政一(『修辞法講話』1917年)、吉田九郎(『文章作法原理』1926年)、渡邊吉治(『現代修辞法要』1926年)等では主な比喩がわずか取り上げられてはいるが、堺利彦(『文章速達法』1915年)では比喩は全く扱われてはおらず、特にこの著作では比喩理論としての修辞学が消滅したことが感じられる<sup>27</sup>。このように、日本でも、西洋と同様に、研究対象を比喩に限定することによって修辞学が応用され得ないものとして衰退していったのである。事実、明治時代と比較すれば、大正時代には取り上げるほどの修辞学研究は見られなかった。注目されるべき研究が少なく、修辞学研究は下火になっていったのである。森岡健二は「大正に入ると急速に衰微し、佐々政一『修辞法講話』(大正六年)を除いては、ほとんどみるべきものがない状態になっている」と述べており、また、速水博司も大正に入ると「レトリックに対する有用感もあまり感じなくなり、積極的に日本化応用をしようとする人もほとんどなく」<sup>28</sup> になったと述べている。この意味では、西洋で18世紀以降見られた修辞学の衰退と同様な変遷の跡を日本でもみることができる。

しかし、既に述べたようにこの時期には西洋修辞学のいわゆる日本化過程が始まったと思われる。本稿ではこの問題についてはこれ以上触れないが、大正時代の論考を見ると、少なくともa) 作文教育への応用が中心となったb) 国語国文学への応用が実施されたc) 文壇での修辞論対無修辞論の対立が克服された等の三点は注目に値するものである。これらの点が本稿で言う日本の修辞学研究の第四期を最も特徴つけているものと思われるが、今後これらの諸点に焦点をあてて詳細に分析していきたい。

#### おわりに

演説法として導入された修辞学は文章の問題に及び、徐々に比喩理論に限られていった。そして比喩理論に限定されることで修辞学は下火になっていった。このように、この論文では日本の修辞学が西洋で見られた変遷とはほぼ同様な形



で再現していることを明らかにした。しかし、これはあくまでも近代日本の修辞学研究の一つの特質にすぎない。既に述べたように、修辞学と、文壇・言文一致運動との関係等の問題は、近代日本の修辞学研究において最も特徴的なものである。これらの関係の解釈が今後の課題とする。

#### 注

- 1) トドロフ、T.『象徴の理論』(1987)及川龍・一之正興共訳、法政大学出版局、73頁。
- 2) 黒田正利訳『君主論』(1935)岩波書店。
- 3) バルト、R.『旧修辞学』(1979)沢崎浩平訳、みすず書房。
- 4) Du Marsais C.C. : Des tropes (1730). Fontanier P. : Les figures du discours (1827-30). 両書はG.Genetteの編集でそれぞれ1967年及び1968年復刻。
- 5) 佐藤信夫『レトリック感覚』(1978)講談社。
- 6) 尾崎行雄『公会演説法』(1877)《尾崎行雄全集》第1巻、平凡社(1926)。菊池大六『修辞及び華文』(1879)《明治文化全集 12》、日本評論社、(1928)。黒岩大『雄弁美辞法』(1882)輿論社。
- 7) 石井研堂『明治事物起源』《明治文化全集》(1908)別巻、日本評論社44頁。  
尚、本稿では正字体を略字体で引用する。
- 8) 演説の開始及び「演説」という訳語の起源について、宮武外骨『明治演説史』(1926)成光館出版部、斎藤毅『明治のこぼ』(1977)講談社、高橋安光『近代の雄弁』(1985)法政大学出版局。
- 9) 『福沢全集緒言』《福沢論吉選集》(1951)第1巻、岩波書店。
- 10) 『福沢全集緒言』。
- 11) 『明治のこぼ』400頁。
- 12) 福地源一郎『辞達而已卒』『東京日々新聞』(社説)1878年12月27日。
- 13) 石井満『明治初期の演説について』『言語生活』第99号、1959年12月。
- 14) 矢野元彦『演説文章組立法』(1884)丸善商社、99頁。
- 15) 馬場辰猪『雄弁法』(1885)朝野新聞社、(緒言)。
- 16) 西周『百学連環』(1870)《西周全集》第4巻、宗高書房、(1981)、91頁。
- 17) 大和田建樹『修辞学』(1893)博文館。
- 18) Campbell G. : The Philosophy of Rhetoric, (1776) Southern Illinois University Press ; Bain, A. (1866) : English Composition and Rhetoric Longmans, Green and Co. ; Quackenbos, G.P. : Advanced Course of Composition and Rhetoric, (1855) N.Y.D. Appleton and Co.
- 19) バルト、R.『旧修辞学』、35頁。
- 20) 服部元彦『修辞学』(1891)国語伝習所、1頁、及び大和田建樹『修辞学』(1893)博文館、6頁。
- 21) 中島幹事『文章組立法』(1891)開新堂、富山房『文章組織法』(1892)富山房、萩野由之『作文法』(1892)博文館。
- 22) 武島又次郎『修辞学』(1898)博文館。
- 23) 速水博司『近代日本修辞学史』(1988)有朋堂、167頁。

- 24) 島村抱月『新美辞学』（1902）早稻田大学出版部。
- 25) 五十嵐力『新文章講話』（1909）早稻田大学出版部、32頁(序)。
- 26) 「小説の文体について」『読売新聞』1898年5月9日、「言文一致の現在、未来」『新文』第1巻第6号、1901年10月1日、「言文一致の三難」『新文』第2巻第1号、1902年2月1日、「一夕文話」『文章世界』第1巻第4号、1906年6月15日、「新文章論」『文章世界』第6巻第5号・第7号・第8号・第11号、1911年4～8月、等。
- 27) 内海弘蔵『文章十講』（1910）文成社、八波則吉『応用修辞学講話』（1913）敬文館、佐々政一『修辞法講話』（1917）明治書院、吉田九郎『文章作法原理』（1926）文集堂、渡邊吉治『現代修辞法要』（1926）日本大学、堺利彦『文章速達法』（1915）実業之世界社。
- 28) 森岡健二『文章構成法』（1966）至文堂、379頁及び速水博司『近代日本修辞学史』（1988）、8頁。

### 討議要旨

立松喜久子氏から、「日本人は起承転結というように最後に結論をもってくる、欧米人の文は最初を読めば結論が分かる事が多い。これは、発想というか、論理の運びが違うのかとも思うが、どのように考えておられるか。」という質問があった。発表者は「日本語が論理的でないとは思わないが、やはり自分も日本語で論文を書く時には、そのギャップには悩んでいる。」と答えられた。さらに自分の発表について、「修辞学が日本に入ってきて、言文一致、写実主義、自然主義などにどのような影響を与えたかを考察するのが、今後の課題である。」と補足された。潟沼潤氏より、日本に導入された修辞法が、西洋のどの段階のものであるのか、との質問があった。発表者は、アメリカの英語教育に関するものが主なものではないか、と回答された。松野陽一氏からは、原子朗氏が、逍遙の講義ノートを全文翻刻した修辞学史の新著を出された旨の情報提供があった。